

[D年] 聖霊降臨節第9主日(2020年7月26日)

【旧約聖書日課】イザヤ書 43章1~13節

- 1 ヤコブよ、あなたを創造された主は  
イスラエルよ、あなたを造られた主は今、こう言われる。  
恐れるな、わたしはあなたを贖う。  
あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ。
- 2 水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。  
大河の中を通っても、あなたは押し流されない。  
火の中を歩いても、焼かれず  
炎はあなたに燃えつかない。
- 3 わたしは主、あなたの神  
イスラエルの聖なる神、あなたの救い主。  
わたしはエジプトをあなたの身代金とし  
クシュとセバをあなたの代償とする。
- 4 わたしの目にあなたは価高く、貴く  
わたしはあなたを愛し  
あなたの身代わりとして人を与え  
国々をあなたの魂の代わりとする。
- 5 恐れるな、わたしはあなたと共にいる。  
わたしは東からあなたの子孫を連れ帰り  
西からあなたを集める。
- 6 北に向かつては、行かせよ、と  
南に向かつては、引き止めるな、と言う。  
わたしの息子たちを遠くから  
娘たちを地の果てから連れ帰れ、と言う。
- 7 彼らは皆、わたしの名によって呼ばれる者。  
わたしの栄光のために創造し形づくり、完成した者。
- 8 引き出せ、目があっても、見えぬ民を  
耳があっても、聞こえぬ民を。
- 9 国々を一堂に集わせ、すべての民を集めよ。  
彼らの中に、このことを告げ  
初めからのことを聞かせる者があるうか。  
自分たちの証人を立て、正しさを示し  
聞く者に、そのとおりだ、と  
言わせうる者があろうか。
- 10 わたしの証人はあなたたち  
わたしが選んだわたしの僕だ、と主は言われる。  
あなたたちはわたしを知り、信じ  
理解するであろう  
わたしこそ主、わたしの前に神は造られず  
わたしの後にも存在しないことを。
- 11 わたし、わたしが主である。  
わたしのほかに救い主はない。

- 12 わたしはあらかじめ告げ、そして救いを与え  
あなたたちに、ほかに神はないことを知らせた。  
あなたたちがわたしの証人である、と主は言われる。  
わたしは神
- 13 今より後も、わたしこそ主。  
わたしの手から救い出せる者はない。  
わたしが事を起こせば、誰が元に戻しえようか。

【使徒書日課】使徒言行録 27章33~44節

- 33夜が明けかけたころ、パウロは一同に食事をするように勧めた。「今日で十四日もの間、皆さんは不安のうちに全く何も食わずに、過ごしてきました。34だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません。」35こう言ってパウロは、一同の前でパンを取って神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始めた。36そこで、一同も元気づいて食事をした。
- 37船にいたわたしたちは、全部で二百七十六人であった。
- 38十分に食べてから、穀物を海に投げ捨てて船を軽くした。
- 39朝になって、どこの陸地であるか分からなかったが、砂浜のある入り江を見つけたので、できることなら、そこへ船を乗り入れようということになった。40そこで、錨を切り離して海に捨て、同時に舵の綱を解き、風に船首の帆を上げて、砂浜に向かつて進んだ。41ところが、深みに挟まれた浅瀬にぶつかって船を乗り上げてしまい、船首がめり込んで動かなくなり、船尾は激しい波で壊れだした。42兵士たちは、囚人たちが泳いで逃げないように、殺そうと計ったが、43百人隊長はパウロを助けたいと思ったので、この計画を思いとどまらせた。そして、泳げる者がまず飛び込んで陸に上がり、44残りの者は板切れや船の乗組員につかまって泳いで行くように命令した。このようにして、全員が無事に上陸した。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 6章16~21節

- 16夕方になったので、弟子たちは湖畔へ下りて行った。
- 17そして、舟に乗り、湖の向こう岸のカファルナウムに行こうとした。既に暗くなっていたが、イエスはまだ彼らのところには来ておられなかった。18強い風が吹いて、湖は荒れ始めた。19二十五ないし三十スタディオンばかり漕ぎ出したころ、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた。20イエスは言われた。「わたしだ。恐れることはない。」21そこで、彼らはイエスを舟に迎え入れようとした。すると間もなく、舟は目指す地に着いた。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## イザヤ書 43章1～13節

- 1 しかし、ヤコブよ、あなたを創造された方  
イスラエルよ、あなたを形づくられた方、  
主は今、こう言われる。  
恐れるな、私があなたを贖った。  
私はあなたの名を呼んだ。  
あなたは私のもの。
- 2 あなたが水の中を渡るときも  
私はあなたと共におり  
川の中でも、川はあなたを押し流さない。  
火の中を歩いても、あなたは焼かれず  
炎もあなたに燃え移らない。
- 3 私は主、あなたの神  
イスラエルの聖なる者、あなたの救い主。  
私はエジプトをあなたの身代金とし  
クシュとセバをあなたの代わりとする。
- 4 あなたは私の目に貴く、重んじられる。  
私はあなたを愛するゆえに  
人をあなたの代わりに  
諸国の民をあなたの命の代わりに与える。
- 5 恐れるな、私はあなたと共にいる。  
私は東からあなたの子孫を連れて来させ  
西からあなたを集める。
- 6 北に向かって、「差し出せ」と言い  
南に向かって、「引き止めるな」と言う。  
私の息子たちを遠くから  
娘たちを地の果てから連れて来させよ。
- 7 それは、私の名で呼ばれるすべての者  
私の栄光のために創造し  
形づくり、私が造り上げた者。
- 8 目があっても見えない者を  
耳があっても聞かえない者たちを連れ出せ。
- 9 国々はすべて一堂に集められ  
諸国の民が集められた。  
彼らの中に、このことを告げ  
初めにあったことを聞かせる者があるうか。  
自分たちの証人を出して、正しいと証言させ  
それを聞いた者に、「彼らは正しい」と言わせよ。
- 10 あなたがたは私の証人  
私が選んだ私の僕である——主の仰せ。  
あなたがたが私を知って、信じ  
それが私であると悟るためである。  
私より前に造られた神はなく  
私より後にもない。

11 私、私が主である。

私のほかに救う者はいない。

12 私が告げ、救い、知らせた。

あなたがたの中に、ほかに神はない。

あなたがたは私の証人——主の仰せ。

私が神である。

13 これから後も私が神である。

私の手から救い出せる者はない。

私が実行すれば、誰が元に戻せようか。

## 使徒言行録 27章33～44節

33夜が明けかけた頃、パウロは一同に食事をするよう  
に勧めた。「今日で十四日もの間、皆さんは不安のう  
ちに全く何も食わずに、過ぎしてきました。34だから、ど  
うぞ何か食べてください。生き延びるために必要だから  
です。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることは  
ありません。」35こう言ってパウロは、一同の前でパン  
を取って神に感謝を献げてから、それを裂いて食べ始め  
た。36そこで、一同も元気づいて食事をした。37船にい  
た私たちは、全部で二百七十六人であった。38十分に食  
べてから、穀物を海に投げ捨てて船を軽くした。

39朝になって、どこの陸地であるか分からなかったが、  
砂浜のある入り江を見つけたので、できることなら、そ  
こへ船を乗り入れようということになった。40そこで、  
錨を切り離して海に捨て、同時に舵の綱を緩め、吹く風  
に船首の帆を上げて、砂浜に向かって進んだ。41ところが、  
深みに挟まれた浅瀬にぶつかって船を乗り上げてしま  
い、船首がめり込んで動かなくなり、船尾は激しい波  
で壊れだした。42兵士たちは、囚人たちが泳いで逃げな  
いように、殺そうと計ったが、43百人隊長はパウロを助  
けたいと思ったので、この計画を思いとどまらせた。そ  
して、泳げる者がまず飛び込んで陸に上がり、44残りの  
者は板切れや船にあるもの〔別訳＝船の乗組員〕につか  
まって行くように命じた。こうして、全員が無事に上陸  
した。

## ヨハネによる福音書 6章16～21節

16夕方になって、弟子たちは湖畔へ下りて行った。17  
そして、舟に乗り、湖の向こう岸のカファルナウムに行  
こうとした。すでに暗くなっていたが、イエスは彼らの  
ところにまだ来ておられなかった。18強い風が吹いて、  
湖は荒れ始めた。19二十五ないし三十スタディオンばかり  
漕ぎ出した頃、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて  
来られるのを見て、彼らは恐れた。20イエスは言われた。  
「私だ。恐れることはない。」21そこで、彼らはイエス  
を舟に迎え入れようとした。すると間もなく、舟は目指  
す地に着いた。

**黙想のためのノート****次主日聖書日課について**

・7月26日「聖霊降臨節第9主日」の日課主題は、「破局からの救い」とされているが、『聖書 新共同訳』には「破局」という訳語はどこにも用いられていない。日本語としての「破局」は、①事が行き詰まって收拾のつかない局面、②悲惨な終局、などと説明されるが（『日本国語大辞典（精選版）』より）、通俗的な用例としては、男女の関係が壊れるような場合に用いられることが多い。聖書日課が取り上げている事柄は、「破滅からの回復」あるいは「（破滅的な）危機の回避」という出来事であり、キリスト教神学が中心に置く「救済論」における「救い」とは異なる次元のものである。

・キリスト教神学の「救済論」は、「すべての者の個々の存在・尊厳の回復」が「真の共同体（神の国）の回復」によって実現するというものであり、その実現の端緒でありカギとなるのが「イエス・キリスト」の存在と「死と復活」の出来事にあるとするものである。

・「救済論」を脇に置くとしても、「破滅」や「危機」の問題は、多くの神学的・信仰的な主題を提示するものである。例えば、「破滅」や「危機」それ自体を神の意志に基づくものとして理解するのか否か、そこに人間の側が責を負うべき人為的要因があるのか否か、それは真に「破滅」や「危機」として認識されるべき事柄なのか否か、などは「聖書」が繰り返し問う事柄である。

**旧約日課（イザヤ 43 章より）**

・「イザヤ書」は、紀元前8世紀、北王国がアッシリアにより滅んでいく時代に南王国で預言活動をした預言者イザヤの名によってまとめられた預言書であるが、すべてが歴史的な預言者イザヤに帰されるものではなく、「イザヤ書」自体が示唆しているように（8:16）、預言者イザヤを師とする預言者集団が伝承した「預言集」と「預言活動（時代に応じた預言の再告知!）」の集成として編纂編集された書物であり、40章以下は、紀元前6世紀、南王国が滅亡、バビロン捕囚を経てペルシャによる解放、ユダヤ帰還・エルサレム神殿再建へと向かう時代の時代に受け継がれた預言者集団の伝承活動の結実であると考えられる。聖書学者は、歴史的預言者イザヤに帰すると考えられる39章までを「第一イザヤ」、40章以下を「第二イザヤ」と呼ぶが、「第一イザヤ」も「第二イザヤ」と合わせて編纂・編集された蓋然性が高く、両者を別書物のように解釈・解説するのは必ずしも適当ではない。

・日課箇所は、いわゆる「第二イザヤ」に区分される中にある。「第二イザヤ」の預言は、バビロン捕囚からの解放を告げ、ユダヤへの帰還とエルサレムの再建を促す内容を告げるものだが、その特徴は、「預言」そのもの、あるいは「預言を告げる者」に焦点が当てられるところにある。日課箇所を、新共同訳は、7節までを42章後半に続く区分とし、8節以下を44章に続く区分として、分けている。

・1節「贖う（ガール）」は、旧約で広く用いられる用語で、「イザヤ書」中にも25例ほどが確認されるが、1例を除いてすべて「第二イザヤ」中での用例であり、「第二イザヤ」の主題を特徴づける用語の一つと見ることができる（「第一イザヤ」中の用例は35:9「解き放たれた」）。なお、35:10の「贖われた」は「パーダー」で、こちらも旧約で広く用いられているが、「イザヤ書」中では4例のみ、その内で「第二イザヤ」では1例。「ガール」の原義は「血縁者（に準ずる者）として行動することにあるとされ、「贖う」と訳される用例は、「（身売りされていた身内の者を、金銭を支払って）買い戻す／取り戻す」ことを意味して用いられている。身売りされていた者を取り戻すのは血縁者の為すべき責任である、という考えが背景にあるのだろう。そこで、「神」が「あなた＝民」を「贖う」ということは、そもそも「神」が「民」を身内としてお考えになられているという前提で言われている、ということが分かる。

・2節の表現は、出エジプト物語における「葦の海の渡海」の出来事や、カナン入植に際しての「ヨルダン川の渡河」の出来事などを想起させるため。「イザヤ書」は、「律法（トーラー）」五書で物語られる「原イスラエル史」の出来事を、これから起こることに先行する予表として解釈するという基本構造を持つ。その中でも、神の一方的な恵みとして「古い生活から新しい生活へ」と導き出されていく「出エジプト」伝承は、初めと終わりに「海・河を安全に渡らせていただく」という出来事を置くことで、「水の中を通る」という象徴表現を聖書全巻に渡って有効なものとしている。なお、「原イスラエル史」を基礎づける「原初史」（創世記1~11章）においても、「ノアの洪水」伝承が「水の中を通る」出来事として置かれている。

**使徒書日課（使徒 27 章より）**

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」の続編として著された、初代教会形成史を教会の「正史」として描くものである。日課箇所は、本書の最終局面で、エルサレムで捕縛され、ユダヤ総督の裁判を経て皇帝の裁判を受けるためにローマに護送されることになったパウロの一団が、海路において暴風雨に遭遇し、乗船した船が難破するも、全員が陸地に上陸したという出来事を物語る中の一部。これらのパウロの旅行記は、「わたしたち」という一人称複数の主語で語られる箇所が少なくないが、これは、本書の著者（ルカ?）がパウロの側近の一人として常に同行していたことの反映であると考えられてきた（もっとも、これを一つの文学上の効果を狙った修辞法と見る者もある）。

・この場面設定は、暴風雨で船が遭難しかける中で、罪人として護送されている者（パウロ）が同船する200人以上の全員に向かって行動したこととしてではなく、仲間たち、パウロのことを監視していた百人隊長や一部の乗組員など限られた者たちを前に語り、行動したこととして描かれているのだろう。そうであればこそ、

難破した船上で囚人たちを緊急避難的に処刑してしまおうとする動きに対して、「百人隊長はパウロを助けたいと思った」(43 節)という事情が成り立つ。

・パウロが、危機を乗り越えるために訴えた「食べること」は、表面的には体力を回復するためのものとして描かれている。しかし、35 節で描かれるパウロの食事の様子は明らかに「パンを裂くこと」(2:41)という表現で伝えられる初代教会の営みとしての「主の晩餐」を示唆しており、本書の著者は、この出来事を描く中に、初代教会の姿を反映させているものと推察される。

### 福音書日課(ヨハネ 6 章より)

・日課箇所は、「パンの奇跡」の出来事と「パンに関する教え」が語られる「パンの章」の中に割り込むように置かれた場面で、共観福音書でも伝えられるガリラヤ湖を弟子たちの舟が渡るときに起こったとされる「主イエスの湖上歩行」伝承である。マタイ福音書およびマルコ福音書でもこの伝承は「パンの奇跡」に接続する出来事として置かれており、一連の伝承として不可分なものとして理解されてヨハネ福音書でもここに置かれたものと考えられる。ヨハネ福音書は、しばしば共観福音書で共有される伝承の物語構成を独自に変更しており、変更しなかったこの箇所には、それなりの意図があったと推察される。ここに先行する「パンの奇跡」の出来事を、共観福音書がガリラヤ湖西岸側に設定しているのに対して、ヨハネ福音書は、ガリラヤ湖(ティベリアス湖)東岸側に設定している(6:1)。すなわち、弟子たちの舟の進行方向は、両者で逆方向を考えている。このような設定の変更が為された意図は、必ずしもはっきりしないが、21 章には第三の復活顕現がティベリアス湖での出来事であったと描かれており、ヨハネ福音書に特別なこだわりがあったことは明らか。

・この「水上歩行」伝承を、マルコ福音書は、「パンの奇跡」の出来事を弟子たちが理解していたかどうか試された出来事だったと位置づける(マルコ 6:52)。マタイ福音書は、特に言及していないが、弟子たちの信仰の問題として描く。ヨハネ福音書では、どちらにも焦点は当てられず、イエスの言葉、「わたしだ(エゴ・エイミ)」(20 節)だけを際立たせようとしているように推察される(「わたしだ」は、マタイやマルコにもある)。

### 来週の誕生日 (7 月 26 日～8 月 1 日)

小田切弘子、榎本貞子、大島悠太、村上真葉。

### 主日礼拝の讃美歌から

・21-6 番「つくりぬしを賛美します」(= I 79「ほめたたえよ、つくりぬしを」)は、もともと 17 世紀のオランダ独立戦争の最中に愛唱された愛国歌であったものが米国の収穫感謝祭の歌として英訳され(「We gather together」)歌われてきた讃美歌だったが、歌詞が愛国的すぎるとの批判から、長老教会の信徒 J・コリーが新しい歌詞を創作し生まれた。

・21-57 番「ガリラヤの風かおる丘で」(= III 5 番)は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩んだ別府信男が中高生キャンプのために作詞し「ともいうたおう」の歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・藤田尚昊が曲を付した。

・21-462 番「はてしも知れぬ」(= I 292)は、19 世紀米国長老派牧師のエドワード・ホッパーが海員伝道に携わる中で作詞したもので、バプテスト讃美歌集に採用された後、広く歌われるようになった。曲は、同時代の楽譜出版業者で自ら作曲もして福音唱歌集の出版を重ねたジョン・グールドが、ホッパーの歌詞をバプテスト讃美歌集に採用する際に作曲。

### 21-6「つくりぬしを賛美します」

#### Wilt heden nu treden voor God den Heere

1. Wilt heden nu treden voor God, den Heere, / Hem boven al loven van harte zeer, / En maken groot zijns lieven namens eere, / Die daar nu onzen vijand slaat terneer.
2. Ter eeren ons Heeren wilt al uw dagen / Dit wonder bijzonder gedenken toch. / Maakt u, o mensch, voor God steeds wel te dragen, / Doet ieder recht en wacht u voor bedrog!
3. Bidt, wakent en maket, dat g'in bekoring / En 't kwade met schade toch niet en valt. / Uw vroomheid brengt den vijand tot verstoring, / Al waar' zijn rijk nog eens zoo sterk bewald!  
(*Nederlandsche Gedenckclanck, Haarlem, 1626*)

#### English version by J.C.Cory

1. We praise Thee, O God, our Redeemer, Creator! / In grateful devotion our tribute we bring; / We lay it before Thee, we kneel and adore Thee; / We bless Thy holy name; glad praises we sing.
2. We worship Thee, God of our fathers; we bless Thee; / Through life's storm and tempest our Guide hast Thou been; / When perils o'ertake us, escape Thou wilt make us, / And with Thy help, O Lord, our battles we win.
3. With voices united our praises we offer; / To Thee, great Jehovah, glad anthems we raise. / Thy strong arm will guide us, our God is beside us, / To Thee, our great Redeemer, forever be praise.  
(*Evangelical Lutheran Hymnary #466*)

### 21-462「はてしも知れぬ」

#### Jesus, Savior, pilot me

1. Jesus, Savior, pilot me / over life's tempestuous sea; / unknown waves before me roll, / hiding rock and treacherous shoal. / Chart and compass came from thee; / Jesus, Savior, pilot me.
2. As a mother stills her child, / thou canst hush the ocean wild; / boisterous waves obey thy will, / when thou sayest to them, "Be still!" / Wondrous sovereign of the sea, / Jesus, Savior, pilot me.
3. When at last I near the shore, / and the fearful breakers roar / 'twixt me and the peaceful rest, / then, while leaning on thy breast, / may I hear thee say to me, / "Fear not, I will pilot thee."

(*The United Methodist Hymnal #509*)